

随心院蔵袖中抄卷第一断簡解説並びに影印・翻刻

山 本 真 吾

〔解説〕

真言宗の名刹、小野・随心院に伝来の『伝受記』一卷は、顕昭『袖中抄』巻第一の巻末部を横断し、上半分を翻して、その紙背を利用して書写されたものである。

この表文書『伝受記』〔某字アリ、カスレテヨメズ〕随心院（外題）は、護持僧作法、十八日観音供事等を記し、奥書に、

○永久三年正月廿日 於上醍醐清瀧經所任先師等口決潛注之而已

金剛乘僧 勝一

とある。この、永久頃に存命で上醍醐清瀧にゆかりある「勝一」なる僧は、『醍醐寺雜記』（大日本史・寛治三年四月四日の条）に、

一清瀧宮一字、同宮一字、拜殿一字、三間三画、巳三寶院權僧正御房建立也、寛治三年四月四日始奉勸請之、

とあり、『醍醐寺蔵伝法灌頂師資相承血脉』（醍醐寺文化財研究所「研究紀要」1、昭53）に、

「第十七」權僧正成尊範俊——勝覺
号鳥羽僧正 付法九人

三寶院才僧正「雖有色衆只兩界大日念誦許（云々）」
長治二—十二—十九日壬午（角、木、）於鳥羽土所（？） 伝受
年四十九師六十八色衆廿口但無作法故六印依所勞也」

とある、彼の三寶院權僧正勝覺であると推定せられる。

背記の『袖中抄』断簡は、これと同時期乃至は、更に遡る時代の書写に係るものと見做されるのが通例であるが、背記の書写を奥書の永久三年（一一一五）頃とした場合、通常寿永二年（一一八三）頃と説かれる『袖中抄』の成立時より、⁽¹⁾はるか七〇年近くも遡ることになり甚だ疑問である。

さらに、後述の如く、背記の奥書に、藤原基家（建仁三₁₂₀₃——弘安三₁₂₈₀年）の名が見え、この記載も本文と同じく横断されているから、表文書の奥書は、所謂本奥書と理解した方が穩当であろうと思われる。何より「勝一」という記載方式が本奥書であることを端的に物語っている。

袖中抄卷第一は、「ひをりの日」「おにのしこ草」・「あぢむらこま」・「ひぢかさ雨」・「もずの草ぐき」・「かひ屋がした」・「おきつしら浪たつた山」・「くものはたて」・「あけのそほふね」の計九つの歌語について、證歌を掲げつつこれを注解している。此度の随心院本は、このうち、「かひ屋がした」以下の四項を伝えていて、それぞれの歌語は、次の和歌を典拠とする。

○朝霞鹿火屋之下_レ下鳴蝦声谷聞者吾将恋_レ八方（萬葉集卷第十、二二六五秋相聞、寄蝦）

○風ふけばおきつしらなみたつた山よはにや君がひとりこゆらん（古今和歌集卷第十八、九九四雜歌下）

○ゆふぐれは雲のはたてに物ぞ思ふあまつそらなる人をこふとて（古今和歌集第十一、四八四恋歌一）

○客爲而物恋敷會山下赤乃曾保船奥榜所見（萬葉集卷第三、二七〇高市連黒人旅歌八首）

本書（背記の『袖中抄』卷第一を指す、以下同）の書誌の概要を記せば、凡そ以下の如くである。

卷子本（軸なし）背記、首欠。料紙は楮交り斐紙（靈母引）で、全五紙、各紙の長さは約五二糎前後。墨界にて、界幅三・二糎、欄眉余白四・二糎。天地は一五・七糎、但し、先述の通り、之れは横断された上半分の寸法である。現存部で一行一四乃至一五字程度を記す。末尾には、本文と同筆にて、

○以月輪前内府御

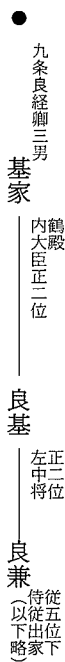
殊秘本云々 委

とある。本文は二行書きにして、墨筆にて漢字交り片仮名文、本行の片仮名及び振仮名(墨・朱)には朱星点が差され、漢字には墨圈点がまま差される。

さて、末尾の記載は、遺憾にも「御」より下の文字を失なつて明に成し得ぬが、この「月輪前内府」なる人物が本書と何らかの関わりを有していたことが知られる。

この「月輪前内府」なる人物は、『諸家知譜拙記追加絶家伝』(『公卿諸家系図―諸家知譜拙記―』昭41・続群書類従完(成会)に拠れば、

月輪九条殿庶流



とあつて、月輪関白九条兼実の孫内大臣藤原基家であることが判る。『公卿補任』・後宇多天皇(弘安三年)の条に、
散位

前内大臣正二位 ×(藤)基家七十七 七月十一日薨(七十八才)。
とあり、建仁三年1111—弘安三年1120に生存したことが確かめられる。

基家が、真観らの反御子左派に属した、権門の歌人であることは周知の所となつており、近時、和歌文学研究の方面の諸先学(2)が多く論じているので、ここでは、この人物に就いての解説を割愛する。但し、本書の出現により、弁入道真観、六条家の蓮性入道知家一派—反為家・反御子左派の一員である藤原基家が、六条家の顕昭に係る『袖中抄』と何らかの関わりを持つていたことが具体的に判明したのであり、基家の歌字の一端を窺うことが出来る点は、注目に値する

と思われる。

次に、本書の表記形態に就いて注目される点を叙すれば、漢字交り片仮名文であつて本行の片仮名及び振仮名に朱星点の差されていることが挙げられる。この本文形態は、秋永一枝氏の推定された、『袖中抄』の自筆原本の形態と一致を見るのである。⁽³⁾ 又、本書の片仮名の字体は、「ウ」・「ケ」・「ス」・「テ」・「ミ」が字源の漢字の形にかなり忠実である点など、鎌倉時代中期を下らぬ様相を呈している（片仮名字体表参照）。特に、「个」の字体が特徴的であり、従来、最古写本と説かれる高松宮家本『袖中抄』の鎌倉書写部（巻四・五・七および十一から二十までの計十三巻）よりさらに遡るものと判ぜられる。即ち、この随心院本は、高松宮家本に変わつて現存最古の写本となるわけである。

（片仮名字体表）

ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
	ホ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
置符	キ	リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
サ、	井	リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
フ、		ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
ロ		ル	ム	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
	エ	レ		メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
	エ	レ		メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ
	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ

『袖中抄』には、頭秘抄の存在を別にすれば、成立過程や伝来系統を問題とするような異本関係は従来指摘されていない。橋本不美男・後藤祥子『袖中抄の校本と研究』（昭60・笠間書院）によつて、本文の字句の異同を見るに、

○ネシミニヲソリテ（6、高松宮本「オソレテ」）

○ユクカヤウ（98、高松宮本「カ」无）

などに、多少の異同が存するものの（翻字注参照）、概ね高松宮本との一致をみる。

又、

○マウス（5、高松宮本「申ス」）

○トルナリ（18、高松宮本「トル也」）

○河ノ下ニナク（36、高松宮本「カハ」）

の如く、漢字と仮名の表記の違いが若干指摘される。

他の諸伝本と同様、本書にも誤写が認められるが、

○カトヤ（トハ）（15、高松宮本「カヒヤ」）

など極めて寡少である。

『袖中抄』の声点に就いては、近時、秋永一枝氏の一連の御論考が公にされている。⁽⁶⁾

○ソノヤニタ（上）ナ（上）ヲ（2）

○オ（平）ト（平）回（16）

など、高松宮本に差されていない声点だが、本書の方には認められることがあり、注意される。

かかる特性を有する本書は、国語史、特にアクセント史研究の資料として、又、和歌文学研究、特に藤原基家の歌学を窺う資料として甚だ珍重すべき文献であると判ぜられるのである。

以上、断簡であること誠に惜まれ、巻第一の末の四項の内容を残すのみであるが、敢て、その全文をここに翻刻・紹介し、学界に呈供せんと考えた所以である。

注

- (1) 橋本進吉「法橋顯昭と守覚法親王」(『史学雑誌』31—3、大9・3)
岡田希雄「袖中抄の著述年代に関する疑問」(『国語国文』2—4、昭7・4)
久曾神昇「顯昭・寂蓮」(昭17・三省堂)
- (2) 西村加代子「顯昭と清輔——学説の継承と対立をめぐって——」(『国語と国文学』54—7、昭52・7)
井上宗雄「真観をめぐって——鎌倉期歌壇の側面——」(『和歌文学研究』4、昭32・8)
安井久善「藤原光俊の研究」第三章第七節光俊と基家(昭48・笠間書院)
黒田彰子「歌人藤原基家の初期——雲葉集編纂までの活動——」(『和歌文学研究』42、昭55・4)
安田徳子「青年期の九条基家——仁治年間まで——」(『名古屋大学国語国文学』46、昭55・7)
黒田彰子「藤原基家の後期」(『国語と国文学』59—9、昭57・9)
- (3) 秋永一枝「袖中抄」声点考」(『国文学研究』93、昭62・10)
- (4) 小林芳規「中世片仮名文の国語史的研究」(『広島大学文学部紀要』30、昭46・3)
- (5) 橋本不美男・後藤祥子『袖中抄の校本と研究』(昭60・笠間書院)〈解題〉
- (6) 注(3)文献。
秋永一枝「注釈をよむ——顯昭「袖中抄」の声点から——」(『国文学研究』96、昭63・10)
〔附記〕 成稿に当たり、小林芳規先生、また、稻賀敬二先生に御教導賜わった。また、写真撮影には小林弘侑氏(真言宗御室派宗務所総務課長)のお世話になった。記して深謝申し上げる。
本稿は平成元年度科学研究費補助金(総合研究A、「平安鎌倉時代語研究資料の総合的調査研究」代表・小林芳規)による成果の一部である。

翻刻

凡例

- 一、随中院蔵袖中抄の奥書を含む全文を、原本に基づいて翻刻したものである。
- 一、行取りは、原本に従った。原本における行頭には「を附してこれを表示し、その上欄にその行数を掲げた。又、各紙毎にその紙数を記した。
- 一、原本における漢字の字体は、現行の活字正字体に従うことを原則とし、片仮名の古字体は、現行の通用字体に改めた。
- 一、声点の位置については、「カ(平)ヒ(平)ヤ(上)」「白(平)波(平)」の如く表示した。
- 一、本書は〔解説〕で述べたように、下半分を欠いている。便宜、橋本不美男・後藤祥子『袖中抄の校本と研究』(昭60・笠間書院)の底本(高松宮家本)に拠って之を補い、に包んで示した。
- 一、翻刻文中、特に注記を必要とする判断される箇所には、*を附して、翻刻の後に纏めて「翻刻注」を掲げた。主に以下の事柄を注した。
 - (1) 高松宮本等との比較の結果、異同の存する箇所。
 - (2) 振仮名の朱・墨の別。
 - (3) 破損・欠損の箇所。

- 1 「 顯昭云 カヒヤカシタトハキナカ ニコガ(上濁)ヒ(上)スルニ別屋ノウチツクリモナキ
- 2 「 ヲツクリテ ソノヤニタ(上)ナ(上)ヲ アマタカキテソレニテコヲカフ ソレヲ
- 3 「 カ(平)ヒ(平)ヤ(上)トイヘリソノタナノ シタニミ(上)ゾ(上濁)ヲホリタレバ 水タマリナドシテ
- 4 「 カハツナクコト一定也 但馬ヘク ダリタル人出雲ヘクダル人ミチニテ
- 5 「 コレヲタシカニミタリトマウス 又別屋ナラデカフコトモアリ オホクハ
- 6 「 ネスミニヲソリテ別屋ヲ ツクルトゾ申ス コレハウチマカセテカヒ
- 7 「 ヤトイフコトナレハ サモトキコユ フ(上)シツ(上)ケ(上)ノヲカヒヤトイフコトハキコエズ
- 8 「 敦隆カ類聚古集ニハ此 哥入夏部蚊火篇 此哥外ニ又載一首哥
- 9 「 アサカスミ香火屋カ下ニナ クカハツ
- 10 「 シヌヒツゝアリトツケムコモ ガモ
- 11 「 此抄ノ趣ハ蚊火タツル屋ノ 下ト云歟 オボツカナシ 蚊火タツル屋トテ
- 12 「 別ニアラハコソサモヨマメ 然^{*}惣ジテヤマガツノ屋ヲヨメリトハミエズ 又
- 13 「 本集ニハ此哥ヲ秋部ニ 入タリ 哥ニハアサガスミトヨメリ 旁蚊
- 14 「 遣火ノ心ニカナハス
- 15 「 奥義抄灌頂卷云 カトヤトハキナカニ魚トルトテスル事也

- 16 「河モシハ江ナトニストイフ 物ヲタテマハシテクチヲヒトツアケテ
- 17 「ソノウチニサノエタ オ(平)ト(平) ロナドヲトリヲキタレバ アタ、マリニツキ
- 18 「テ魚ノアツマルヲトルナリ 鳥ナド入ヌレバ魚ノオドロキテウス
- 19 「レハ ソノウヘニタカク屋ヲ ツクリヲホヒテ マモリトテ人ヲスヘテ鳥
- 20 「ヲモオハセ 又クヒ物ヲウチ マキナドナトシテコノ魚ヲカヒツケサスレバ
- 21 「コノ屋ヲカヒヤトイフナリ タトヘバフシツケトイフ物ヲヒキツクロヘルナルベシ
- 22 「此義イカトキコユ フシツケトハ 澗ニ柴ト云事也 又御楽ト云事
- 23 「アリ 池水ノ中ニ編竹 籬ニ養魚也云々 竹籬ヲアミテ
- 24 「タツルコトハアレトモ 屋ヲツクリオ ホフト云事ハ田舎人ニヒロクタツヌレ
- 25 「トキコエス 又フシツケハオホヤウ ナドサムキ時スル事也 カヒヤガシタニカハ
- 26 「ツナクトヨミカタシ 又ミモリトハ 田ニ水マカスル人也 如何
- 27 「堀河院百首ニ公貫卿水哥云 マスヲカモ(上)フ(上)シ(上)ツ(上)カ(平)フ(平)ナ(上)フ(平)シツケシカヒヤ(ガ)シタハコホリシニケリ
- 28 「此哥心ハフシツケニカナヘリ サレト 其證不見歟
- 29 「登蓮法師云 常陸國ノ風土 記ニアサクヒロキヲバ沢トイヒ フカクセバキ
- 30 「ヲハカヒヤトイフトミヘタリトマ ウシ侍シカド 彼風土記未見バオボツ

- 31 「カナシ 大様ハ人オ(上)ト(上濁)シ(上)事歎」又登蓮法師ハカヒヤトハ水ノ下ノア
- 32 「ナライヘハ カヒヤカシタニラシソ」ナクナルト人ノヨミタルハ假事也トマウ
- 33 「シキ トカクイヒテヒトスチナラ」ヌハ不実ノ事歎
- 34 「童蒙抄云 カヒヤハ古來難義也」岸ナドノクツレタルトコロニシ(上)バ(上濁)ノ(上)ネ(平)ナド
- 35 「サシオホヒテイ(上)カ(上)ナ(平)ル(上)ライフナ」ドゾ申メルハ假事ナメレ
- 36 「タヽ河ノ下ニナクトイフヘキトソ」心エラレタル ヒトハ(上)トハカヨフ音也 ヤハ
- 37 「タヽラケル文字也 ヤモシハ文」字ノタラヌ所ヲラク 哥ノ習也
- 38 「ア(上)ツ(上)フ(上)ヽス(上)マ(平)ナ(上)コ(上)ヤ(平)カ(上)シタ」トイフガゴトシ
- 39 「此義コヽロエス 河ヤカシタトイハム」事マコトヽモヲボエズ 岸ノイヤヲ云
- 40 「ト云義ハ 和語抄ニハヘメリサレ」ドソレモコヽロユカズ コカヒノヤヲコソカヒ
- 41 「ヤトマウスナレハ 万葉ノ哥ニハ」カナヒタレ
- 42 「ヘ。オキツシラナミタツタ山
- 43 「カセフケハオ(平)キ(上)ツ(上)シ(平)ラ(平)ナ(平)ミ(平)タツタ」山ヨハニヤキミガヒトリコユラン
- 44 「顯昭云 是ハ古今哥也」注云 ア 人此哥ハムカシヤマトノクニナリケル
- 45 「人ノムスメニスミワタリケリ 此」女オヤモナク成テ イヘモワロクナリユク

46 「 ホトニ此^{*}ラトコ河内クニノ人ヲ
アヒシリテカヨヒツノカレヤウニノミナ

47 「 リユキケリ サレトモツラケナ
ルケシキモミ(平)エ(上)デ(平) 河内ヘイクゴトニオ

48 「 トコノコノコトクニシツノイ
ダシヤリケレバ アヤシト思テナキマ

49 「 ニコトコ^{*}ロモヤアルトウタカ
ヒテ 月ノオモシロカリケルヨ カウチヘイク

50 「 サマニテ 前裁ノ中ニカクレテ
ミハベリケルハ ヨフクルマノニコ(平)ト(上)ヲカキ

51 「 ナラシツノ此^{*}哥ヲヨミテネニ
ケレバ コレヲキテイトアハレト思

52 「 テ ソレヨリ又ホカヘモマカラ
ズナリニケリトナム^(いひ)ツタヘル

53 「 今案^ニ オキツシラナミトハタツタ
ヤマトイハントテイヒラクナリ シラナミ

54 「 トハ ヌスヒトライヘハ ラソロシキ
モノタツタ山ヲヒトリコユラントヨメル

55 「 ヨシヨロツノフミニノセタリ ヒトモ
ミナソノヨシヲ申スハ アラマシゴト也

56 「 万葉集第一卷ニ遣^ニ長田^{ヲク}王^ヲ於伊勢齋宮^ノ時^ノ山辺^ノ御

57 「 井作

58 「 ミ(上)ナ(上)ソ(上)コ(上)ノオキツシラナミタツタ
山イツカコエナンイモガアタリミム

59 「 是同心歎 古哥ハ皆如此 ツノクル也
シラクモノタツタ山トモ ニシキタツタ

60 「 山トモ 衣タツタヤマトモ クモノ
キヌガサタツタ山トモヨメリ サレバ風

61 「フケハ ヲキツシラナミタツタ 山トモヨメル也

62 「又

63 「ヌスヒトノタツタノヤマニイリ ニケリ オナジカ(平)ザ(平)シ(平)ノ(平)ナ(上)ヲヤカザン

64 「是ハ屏風ノエニタヒトノタ ツタ山ニテヌス人ニアヒタルカタカケルヲ

65 「ヨメルナリ ヌスヒトラ白*ハク波ハ(平)ト モイヒリョウリン緑林ナド云ハ常事也 (然而か)

66 「ノ女カナラスシモソレヲオモヒ (ては)ヨマズモアリケン

67 「無名抄云 シラナミトイフハ ヌスビトラ云也 サルモノタツタ山ヲオソロ

68 「シクヤ一人コユラムトオホツカ ナサニヨメル哥也

69 「綺語抄云 シラナミヲヌス人 トイフコトヲヨメル也

70 「奥義抄云 盗人ヲシラナミト イフトカケルコノ哥ヨリ事オコル欵 又

71 「ヌスヒトラシラナミトイフハ白波 ト云本文也 コノ哥ヨリコトオコルトイハン事イカズ

72 「へ。クモノハタテ

73 「ユフサレハ ク(平)モ(平)ノ(平)ハ(上)タ(上)テ(上)ニモノ ゾオモフアマツ空ナル人コフルミハ

74 「顯昭云 クモノハタテモハソ ラノヒロキコノロナリ ハタハ将トイフコト

75 「ロナリ 手ハヨロツノコトニワタ リタルコトナリ ツネニハユフベノ雲ノ旗ノ

76 「手ニタルヲ雲ノハタテト ハイフトアマタノフミニ申シタレド 万

77 「 葉集ノ長哥ヲミルニ *クニ 國ノ ハ(上)タ(上)テ(上)ニサキニケルサクラノハナトヨミ

78 「 *タ タレハ 國ニハ旗手アリトイ フベクモナケレバ ソラノヒロキヲバクモノ

79 「 ハタテトイヒ 地ノヒロキヲ バクニノハタテトヨメルニヤトナズラヘテオ

80 「 モフナリ タトヒ雲ノ旗手 トイフベクハ 花ノイロノニサキミチタ

81 「 ルヲ旗手トイフヘキニヤ ソレハナヲコノユカズ 古哥ラバ哥ヒト

82 「 ツニツキテハイミシク尺ス (釋) ルホドニ アマタノ哥ラミルトキニタガラ也 (お)

83 「 タトヘハオホフネノユタノ タユタトイフコトラ船ノ湯カク手

84 「 ノタクキヨシライフ程 ニ ネヌナハノユタノタユタトイフ哥ニテハ

85 「 オホキニタカフカコトシ

86 「 万葉第八卷長哥云

87 「 ラトメラカ カサシノタメニ タハレラノ カツラノタメト *カニ *ハ(上) タ(上) テ(上)

88 「 シ(上)キ(平)マ(上)セ(平)ル(平) 國ノ(上)波 多 三

89 「 ニホヒ ハ(上)モ(平)ア(平)ナ(平)ミ(上) ニサキニケルサクラノハナノ

90 「 此長哥ノコトハニコノロエアハ スベキナリ フ雲ノハタテト云モ同事也 日ノ

91 「 無名抄云 トヨハタクモトイ ハニアカクサマノナル雲ノミユルカ旗ノ

92 「 イラムトスル時ニ西ノ山キ ハニアカクサマノナル雲ノミユルカ旗ノ

93 「 足ノ風ニフカレテサハクニニタル也其ハタニニタル雲ノタエマヨリ

94 「 入日ノサシテイリヌレハ三日許ハ雨フラズシテソラモコニロヨクテル也*

95 「 サレハ 万葉哥ニワタツミノトヨ平ハ上タ上雲ニイリヒサシコヲヒノ月夜ス

96 「 ミアカクコソトヨメリ

97 「 次ニクモノハタテノ哥ハソノトヨハタ雲ノサダメモナクサハギカハリ

98 「 ユクカヤウニナムオホユルトヨム也 其雲ノソラニアルモノナレバウハ

99 「 ノソラナルヒトラコフルニヨソフル也 是ヲ又クモトイフ虫ノ

100 「 手ハヤツアレハソノクモノスハノキニミユルモノニ手ラクミタル

101 「 様ニミユレハソレニヨソエテヨム也 是モ事ノ外ノ僻事ニ

102 「 ナキニヤ 重之カシニタルクモノニケザマニフシタルニ風ノフキケレバ

103 「 イキタルヤウニ手ノハタラ様キケルヲミテヨメル哥

104 「 サニカニノク平モ平ノハタテノサハグカナ風コソ雲ノイノチ成ケレ

105 「 コレヲミレハ 虫ノ手ヲモクモデトイハンニトガナシ

106 「 奥義抄云 クモノ手ラクモノハタ手トハ云也 キヌニノウルヤラ

107 「 ウナレハヨソヘテ云也クモトイフニツキテソラノクモニヨソヘテアマ

- 108 「 ツソラナル人コフルミハトヨ
 メリ 雲ノハタテニ物思トハ クモノイ
 〔云〕
- 109 「 ハトカクカキタレハ ヒトス
 ゼナラントカクナン思トイフ心也
 〔云〕
- 110 「 ク(平)モ(上)テニ物ヲ思コロカナト
 〔云〕 哥モコノ心ニコソ
- 111 「 今案云 トヨハタクモトクモノ
 ハタチト別事也
- 112 「 古語云 トヨハタクモトハ海
 ノ雲ノ古語也 端応図云 豊旗雲
 〔トヨハタク〕
- 113 「 者瑞雲也 帝德至時出
 現雲也 雲勢似旗也云々
 〔トヨハタク〕
- 114 「 又タトヒ旗手トイフニテモ
 雲ニテア(る)ベシ アマツソラニヨスル故也
- 115 「 蜘蛛ノ手ヲ機^{ハタテ}ラルニヨセテ
 イカダハ又二重ニ雲ニハヨスベキ ア
- 116 「 マリニ任意ナル義也 但重
 之ガ哥ヲ蜘蛛ノシニタルラミテ
- 117 「 ヨミタレハ 虫トハヨミキリ
 タル サラバクモトイフムシノ機手ニテ
- 118 「 雲ノ旗手ニハヨスヘカラ
 ズ重之ガ集ヲミレバ クモノ手ヒトツ
 〔ハタテ〕
- 119 「 ラチタルカニ三日マテウ
 ゴクラヨメルトテ第三句ハ ウゴクカナ
 〔ハタテ〕
- 120 「 風ライノチニタノムナルヘシ
 トアリ コレハ古今ノ雲ノハタテトイ
- 121 「 フ哥ラクモト云詞同ケ
 レバ 蜘蛛ニヨミナシタルナルベシ 藤ヲ淵ト
- 122 「 ヨミナスカコトシ
- 123 「 又源順カ假名序ニ
 〔云〕

124 「オモフコヽロクモノハタテ ニアリナガラオリタチテイハムカタナシ

125 「トカケリ コレモ雲ノ旗手 ヲ機ニヨセテ織立^{フリクツ}トヨメルニヤ イカニモ

126 「國ノハタテニヲモヒアハス ベキナリ

127 「ヘ。アケノソホフネ

128 「タヒニシテモノコヒシキニヤ マモトノ赤^{ア(上)ケ(上)ノ(上)ホ(上)フ(上)ネ(平)}乃^{ア(上)ケ(上)ノ(上)ソ(上)ホ(上)フ(上)ネ(平)}曾^{ア(上)ケ(上)ノ(上)ソ(上)ホ(上)フ(上)ネ(平)}保^{ア(上)ケ(上)ノ(上)ソ(上)ホ(上)フ(上)ネ(平)}船オキニコグミユ

129 「顯昭云 アケノソホフネト ハアケハ赤ト云タレバウタガヒナシ 或ハ

130 「ア(上)カ(上)ラ(上)ヲ(上)フ(上)ネ(上)トモヨミ 或ハ サ(上)ニ(上)ヌ(上)リ(上)シ(上)シ(上)ヲ(上)フ(上)ネ(平) 之小船 モヨメリ アカニ

131 「ヲヌ(上)レ(平)ル(平)フネナリ

132 「ヲキキクヤアカラヲフネニツ^{*} トヤラムワカキ人ミテトキアケムカモ

133 「又長哥云 サニヌリシヲフ ネ^まウケテ云々

134 「又云サニヌリシヲフネニモ ガモタマヽキシマコトカイモガモ云々

135 「ソホトハスコシト云事欵 チヒサ キコヽロナリ

136 「万葉云イ(上)ヤ(上)ヒ(上)メ(上)ノヲ(上)モレ(上) 神サ(平)ビ(上)ア(平)ヲ(平)グ(平)モ(上)ノ

タナビク日スラアラレソホフル

「伊勢物語ノ詞ニモアメノソホフ」
リケルニトカケリ

138 「又日本記ニハマ緒トカキテソ會ホニホ保ホ余ニトヨメリ上

139 「此文ニヨラハ 赤義ヲヤカテソホト可云歟

140 「是ハ別事也

141 「常詞ニモツユニソホヌルトイヒ ソホニクレトイフハ尚スコシト云心也

142 「無名抄云綺語抄奥義抄童蒙抄等ニ此ソホフネノ事アカサズ

143 「可秘藏事歟

144 「隆縁ト申僧 アケノホソ上フネトヨミテハベリキ 万葉ト相違セリ

「(七行空白)

152 「以月輪前内府御

153 「殊秘本云々 委

〔翻刻注〕

- 2タ(上)ナ(上) 高松宮本ニハ声点无 27堀河院百首ニ 高松宮本「ニ」无
- 5マウス 高松宮本「申ス」 水哥 高松宮本「水哥」
- (又) 筆画残 「記」筆画残
- 6ヲソリテ 高松宮本「オソレテ」 30ミヘタリトマ(ウシ)高松宮本「ミエタリト申」
- 7(カヒ)ヤ 高松宮本「カ(平)ヒ(平)ヤ(上)」 34カヒヤハ 「ヤ」ト「ハ」ノ右下ニ朱ノ汚レアリ
- 8(哥) 筆画残 36河 無松宮本「カハ」
- 9シヌヒツゝ 高松宮本「シメビツゝ」 37(字) 筆画残
- ツケム 高松宮本「ツケン」 39コゝロエス 高松宮本「心エズ」
- 12然 高松宮本ニハ此字无、川越市立図書館本・(事) 筆画残
- 15カトヤ 前田尊経閣文庫本ハ「又」ニ作ル 44ア(ル) 筆画残
- 17オ(平)ト(平)(ロ) 高松宮本「カヒヤ」、随心院本誤マレルカ 46ヲトコ 高松宮本「オトコ」
- 18ツキテ 高松宮本「ツキ」 河内クニ 高松宮本「河内ノクニ」
- トルナリ 無松宮本「トル也」 47(ル) 筆画残
- 19ソノウヘニ 「ノ」ト「ウ」ノ右上ニ朱ノ汚レアリ 49コゝロ 踊字虫損
- 20オハセ 高松宮本「ヲハセ」 51此 高松宮本「コノ」
- 21イフナリ 高松宮本「イフ也」 54ヲソロシキ 高松宮本「オソロシキ」
- 55ツノフミ…アラ 高松宮本衍文ハ省略ス

23 「編」^{アミ} 「籬」^{アサキ} 傍訓ハ墨

26 (田) 筆画残

65 「白」^{シロ} 「波」^ハ 傍訓ハ墨、声点ハ墨圈点

77 「國」^{クニ} 傍訓ハ墨

78 タレハ 「ル」ヲ抹消シ右傍ニ「レ」ヲ記ス

88 「旗手」^{ハタテ} 傍訓ハ墨

「波」^ハ 「多」^タ 「豆」^{マメ} 傍訓ハ墨

94 (三) 筆画残

98 ヌクカヤウニ 高松宮本「カ」无

115 「機」^{ハタテ} 傍訓ハ墨、高松宮本之レ无

118 「旗手」^{ハタテ} 傍訓ハ墨、高松宮本之レ无

119 ラチタル 高松宮本「オチタル」

123 (モ) 筆画残

124 ココロ 高松宮本「心」

126 ラモヒ 高松宮本「オモヒ」

128 ヤ(マ) 高松宮本「山」

130 ア(上)カ(上)ラ(上)ヲ(上)フ(上)ネ(上) 高松宮本声点无

56 「長田」^{ヲサタ} 傍訓ハ墨

136 万葉 高松宮本「万葉集」

イ(上)ヤ(上)ヒ(上)メ(上)ノヲ(上)モレ(上)

高松宮本「イ(上)ヤ(上)ヒ(上)メ(上)ノ

(平)ヲ(上)ノ(上)レ(上)」

138 「曾」^ソ (保介)^{ホヘニ} 傍訓ハ墨

142 (童) 筆画残

144 アケノホソ(上)フネ高松宮本「アケノホ(上)ソ(上)フ(平)ネ(平)」

131 ヌ(上)レ(平)ル(平)松宮本声点无

132 ヲキ 高松宮本「オキ」

ツ(平) 高松宮本声点无